

2023/06/27

第22章 データの記録と文書化/第23章 コード化とカテゴリー化

第VI部 テキストから理論へ『質的研究入門』ウヴェ・フリック

K原

第22章 データの記録と文書化 (pp.357-70)

- データの収集と産出のための主なアプローチをこれまで紹介してきたが、産出したデータを分析する前に、それらを文書として記録・編集しなければならない。インタビューの場合は、録音し文字化すること、観察の場合は、文書として記録することである。大事なのは、いかに発言や行為の文脈を詳細で豊かなものにするか？このデータ収集のプロセスを諸々に記録する。それが、実際の分析の基礎となる。
- データの文書化の3つのプロセス：
データの記録→編集（文字化）→「新しい」現実の構築（産出されたテキストから or テキストにおいて）

1) データの記録に関する新たな可能性と問題 (p.357-)

- 録音・録画の技術の進歩が、会話分析や客観的解釈学などのような形態の分析を可能にした。機材を用いることで、研究対象の人々や研究者から独立してデータを記録することができるようになり、インタビューや日常的な、あるいはカウンセリングでの会話がそのまま記録できるようになった。
- 録音・録画手段は、必要最低限な範囲に限るべき。
- 録音・録画のテクノロジー以前は、メモによる記録が種類だった。録音・録画により、データをとにかくまずは集めておく、という新しいタイプのデータ種集が行われるようになった。
- 質的研究に用いられるテクノロジーが調査状況にもたらす影響はプラス・マイナスどちらもある。例えば、研究上の倫理、録音・録画による調査状況の変化、インタビューの匿名性の喪失などに関わる新しい問題が課題となる。場合によっては、適切な記録方法として録音・録画ではなくメモによる記録等も視野に入れる必要がある。

2) フィールドノート (p.360-)

- フィールドノートは、研究者が取るメモであり、古典的な記録の手法。
- フィールドノートは、一般的にはできるだけ早期につけなければならない (Lofland and Lofland 1984)。観察を中断することで、相手との関係にぎこちなさが生まれてしまうかもしれない。アクションリサーチの場合、記録のための時間を取ることが難しい。代替策は1つの参与観察が終わったらそこで印象をメモすること。

- フィールドノーツは、後になって見直したときに、観察されたものと研究者が解釈や要約を通してまとめたものと区別がつく様にしておく必要がある。※ブラッドリーによる4つの形態の分類（詳細は、p.362参照）
- フィールドノーツの作成とともに、テキストにおける現実の生成が始まる。そこには研究者による選択的知覚（選択制 selectivity）と提示の仕方がある。選択しているのに、研究者によって偏りが出る。だから、研究者による記録だけではなく、研究参加者に日記や日々の記録を書いてもらい、補足しておくことで選択性を削減できる。また、写真やスケッチ、地図等の視覚的資料をノーツに書き加えたり、電子ノートや口述機を使ってノートを記録するという方法もある。

3) 研究日誌 (p.362-)

- 調査の実際の進め方や個別のノーツの焦点の比較可能性を高めるために、進行中の調査プロセスを反省し、それを記録する必要がある。すべての参加者が研究日誌を継続的につけるという方法がある。それほど重要でない事実や、見落とされている事実の記述も盛り込む必要がある。記述の比較を通し、それらに現れた見方の違いを比較検討することで、調査プロセスがより間主観的で、明示的なものになる。
- 調査対象の日常に録音・録画の形で鑑賞する場合には、絶対に設問に回答するために必要なものを録音・録画するというルールに従うとよい。できる限り機材の存在を減らし、録音・録画方法の目的と意味を調査される人々にできるだけ細かく伝えることで、日常的な行動を「つかまえ」られる可能性が高くなる。

4) 記録用紙 (p.363-)

- インタビュー時、データ収集の文脈と状況を記録する用紙を用いると役立つ。場所を変えたり、さまざまなインタビュアーが関わる場合は、それがインタビューそのものに影響を与えうるので、それも記録すべき。

5) 文字化 (p.364-)

- 録音・録画したデータは、次に文字化（トランスクリプション）する。標準的な方法は確立されていない。
- 言語分析の場合は、できる限り発言のみならずその途切れ等できる限り正確に表記することが目指されるが、その手順が適切か疑問詞されているところもある。設問に最低限要求される詳細さと正確さを基準として文字化を行うほうがより適切だろう。（慣例や規則等は pp.365-6 の囲みを参照）

6) テキストとしての現実：新しい現実としてのテキスト (p.367-)

- 社会的現実の文字化は、どの様な方法であってもその技術上・テキスト上の構造化と限

界に既定されるため、異なる方法を用いると、文字化する内容に方法ごとに独自の道筋で接近することになる。また、文字にすることで出来事からその一過性を失わせる。

- テクストの形で実態あるものにするのは、ひとつはテキスト化された現実の再構築として実体あるものにする。
- 資料を形にするための主要な目的は、事例をその特殊性と構造において文書化すること。腑分けテキストは、研究対象の現実を特異な仕方でも構築するものであり、解釈方法が向けられる実証的資料として、その現実をアクセス可能なものとするものである。

第23章 コード化とカテゴリー化 (pp.371-)

GTAに基づき、質的なデータを解釈し、いかに理論を構築するか？の手順が書かれた章。あくまで、概念や理論から始まるのではなく、実際のデータから始まる (grounded) 分析となっている。

- データをどのように解釈するかは、質的研究の中の大事なポイントである。
- 質的研究には、データ収集のために確立された技術が必要なものとそうでないものがある (必要なもの：客観的解釈学や会話分析 必要なもの：質的内容分析、ナラティブ・データを扱う方法)。
- GTAの場合、どのようなデータを次に集めるべきかが、データ解釈を通じて明らかになる。
- テキストと関わる2種類の基本的戦略は、区別できる：
 1. カテゴリー化や理論開発を目標とする資料のコード化
 2. 事例やテキストの構造を再構成することを目指すシーケンス分析 (sequence：順序、並び)

1) グラウンデッド・セオリーのコード化 (p.372-)

- グラウンデッド・セオリーのコード化とは、データに根ざした理論を開発する目的で集められたデータを分析する手順のこと。
- コード化とは、データから理論を組み立てる中心的なプロセスのこと (Strauss and Corbin: 1990: 3)。
- コード化には現象、事例、概念等の継続比較や、テキストに向けられる問いの定式化が含まれる。はじめはテキストの内容にできるだけ近いものをつくり、徐々に抽象化レベルを上げていく。
- ストラウスとコービンのコード化へのアプローチ：データ解釈のプロセスを、データを扱ういくつかの手順に分けるという特徴がある (オープン・コード化、軸足コード化、選択コード化と名付けられている)。この手順は、別々の段階に行われるものということではなく、テキスト・データの扱い方であって、必要に応じてこの手順の間を行き来したり同時に用いたりするものである。

- 「概念」あるいは「コード」とは、具体的なデータに与えられるものである。
- 手順におけるカテゴリー化とは、そうした概念を包括的な概念へまとめること、概念、包括的概念もしくはカテゴリー、上位概念との間の関係性を縛り上げていくことを意味する。

収集したデータ		抽象化		理論構築
データに「概念」「コード」が与えられる	→	カテゴリー化 包括的概念へまとめる	→	カテゴリーや概念のネットワークと、それらの間の関係性の定式化
オープン・コード化		(ス) 軸足コード化 (グ) コード化ファミリーの作成 (シャ) 焦点を絞ったコード化		(ス) 軸足コード化の繰り返し= 選択コード化

● オープン・コード化

得られた具体的なデータを、少し概念化すること。データと事象を概念の形で表すこと（具体例は pp.374-5 参照）。

- このオープン・コード化の次に、研究設問に特に関連するデータ中の現象を中心に、オープン・コード化で得られたコードをまとめ、そこからカテゴリーを形成する。
- この段階のコードは、カテゴリーの内容が鮮明に浮かび上がるもの、カテゴリーがどのデータから得られたか思い出せるものであるとよい。カテゴリー名は、社会科学系の文献から得られた概念（構成コード）もあれば、インタビューがもちいた表現（生活内コード）から取られることもある。2つのコードでは生活内コードが優先される。
- カテゴリーはさらに発展する。このために、カテゴリーの特性に名前をつけ、その特性を連続戦上に表す作業を行う。内容に則してカテゴリーを正確に定義するためのものであり、次元化と呼ばれる。
- オープン・コード化はさまざまなレベルの抽象化で用いられる（一行一行、一文、一分節ごとなど）が、重要なのはコード化の目的から離れないこと。
- 研究者は何度も基本的な問いを念頭にテキストに向かうことが重要（基本的な問いの内容は pp.376-7 参照）。
- ひっくり返しのテクニック（次元の両極端の間で比較）と赤旗振りテクニック（まったく異なった文脈からの現象と比較）という独特のテクニックがある。

● 軸足コード化

- 生成された多数のカテゴリーから、さらに展開すべきカテゴリーを選ぶ。最終的に、あるカテゴリーと別のカテゴリーとの関係性が練り上げられる。これにより、カテゴリ

ーやサブカテゴリー間の関係を明確化・確立することが重要 (p.378 コード化パラダイムの図参照)。

● 選択コード化

- さらに抽象度の高いレベルで、軸足コード化を繰り返すこと。中核カテゴリーを練り上げる目的で行われる。
- 事例に関するストーリーが語る中心的な現象に対してひとつの概念 (= 中核カテゴリー) を付与し、その概念にその他のカテゴリーを関係づける。
- 分析結果は「ひとつの」中核カテゴリーあるいは「ひとつの」現象にならなければならない。
- データの中にパターンとその発生条件を見出すことが目的であり、データをコード化パラダイムに沿って分類することで、理論を用いて「このような条件があった場合これが発生し、そうではない別の条件があった際には別のこの現象が発生する」ということができる。
- 分析は、理論的飽和に達した際に終了する。理論的飽和とは、これ以上コード化やカテゴリーの検討を行っても新しい知見は出てこないと判断される段階のこと。
具体例は、pp.380-1 ケーススタディ 23.1 を参照。

● グレイザーのアプローチ：理論的コード化

- グレイザーはストラウスとコービンのアプローチ、特にコード化パラダイムと軸足コード化の考え方を批判している。これらは、ある構造をデータに押し付けていて、浮上してくる構造を発見するものではないとのこと。
- グレイザーのアプローチの場合、同じようにまずはオープン・コード化が行われるが、次の段階で、基本的コードのリストを作る、コード化ファミリーを提案している (具体的なコード化ファミリーのリストは p.383 表 23.1 を参照)。

● シャーマズのコード化へのアプローチ

- オープン・コード化を一行一行丹念に行うことを勧める。これにより、研究者の同期や不安、未解決の個人的問題等を回答者やデータに押しつけてしまうことが避けられる (具体例は pp.384-5 囲み 23.2 を参照)。
- まず一行ごとに分析し、その結果できたコードをさらに深く探る。まずオープン・コード化をして、次に「焦点を絞ったコード化」が行われる。

グラウンデッド・セオリーの上記全てのバージョンにおいて、最も大事なものはオープン・コード化のステップである。

- 方法論一般への貢献は何か？
 - この方法は、テキストの一環した分析を行う。これによりテキスト解釈が実現・実行可能になる。カテゴリーとその間の関係を練り上げ、理論を形成すること、帰納的アプローチから、徐々に演繹的にテキストやカテゴリーを扱うこともこの方法の特徴。
- この方法を研究プロセスにいかに関与させるか？
 - この方法は、理論構築のための研究プロセスの主要部分となっており、象徴的相互作用論（＝研究対象じしんの認識、主観を分析する）が理論的基盤として大きな影響を与えている。
- この方法の限界は？
 - 「研究方法」と「わざ（アート）」の境界がみにくく、「研究方法」として教育することが困難である。
 - コード化や比較の可能性が際限なく存在する。結局、選択・終了の決定はその研究者次第となる。そうすると、膨大なコードと比較の可能性がもたらされる。現実的な解決策は、いったん分析を中断し、すでに得られた結果を考慮し、優先順位のリストをつくること。また、1人ではなく複数の研究者がグループで行い、討議・検討することが有用である。

2) テーマ的コード化 (p.387-)

- 「異なる世界や社会集団には異なった見方が存在する」という前提があり、「ある現象やプロセスに対する多様な見方が、社会の中でどのように広がっているか」を研究対象とする際にこの方法を用いる。そのためには、上記で述べた最初のStraussの方法を、若干変える必要がある。
 - サンプルング時の観点は、「比較に最も適当な集団群はどれか」ということ。そのためサンプルング方法は事前に決定される。Straussの方法のように、解釈の進行状況によって決定されるのではない。
 - 比較可能なようにデータ収集のトピックは決めておくが、そのトピックへの被調査者側の視点には開かれた形でデータ収集を進める。
- テーマ的コード化の分析手順
 - 複数の段階からなっており、分析の比較可能性が保てる形でデータを解釈する。インタビューでの典型的発言（その事例の「モットー」、研究設問に関わるその人物の簡単な描写など、研究対象に関わるもの）、研究対象に関してそのインタビューが語った中心的テーマなどを事例描写に含む（具体例は p.388 囲み 23.3 を参照）。
 - テーマ的コード化は、Straussの手順とは異なり単独の事例を深める分析をまず行う。個々の人物が研究のテーマを扱う意味の脈絡を、研究の流れの中で保持することが

目的の1つにある。続いて、一事例についてのカテゴリーの関係図をつくる。このとき、オープン・コード化や選択コード化の手順を用いる（＝ストラウスと同様）。ただし、ここで選択コード化を行うのは、中核カテゴリーを形成することが目的ではなく、一事例に関してテーマとなる領域やカテゴリーを明らかにすることである（具体例は p.389 囲み 23.4 を参照）。その後、複数の事例でさらにカテゴリーやテーマとなる領域を確認・検討する。テーマ領域をさらに詳細に解釈するためには、テキストひとつひとつの文章をより細かく分析する。そのためにストラウスらのコード化パラダイムを出発点として用いる（具体的な問いかけの内容は p.390 参照）

- この分析プロセスの結果、個々の事例の独自性を維持しながら研究対象への事例の関わり方をまとめることが可能。明らかになったテーマの構造は、事例やグループを比較する際にも活用可能。
- できあがった構造をもとに、事例をひとつひとつ継続的に比較すると、それぞれの調査対象者が個別のテーマをどのように捉えているかに関する多様性が明らかになる。

● 方法論一般への貢献は？

- この方法は、第一段階は事例ごとの分析を実施、第二段階以降に個別の事例を超えた分析を実施する。解釈の比較可能性があがり、個別事例や社会集団の特異性に対して敏感かつ開かれた研究を行うことができる。
- この方法論は、社会の多様性が前提とされていて、社会集団にみられるものごとやプロセスに関する見方の多様性の分析に焦点が当たる。一般化は事例やグループの比較に基づいており、理論開発を目的としている。

● この方法の限界は？

- 特定の対象に関して既定の複数のグループを比較する研究に適している（理論開発の余地はストラウスの方法よりも制限される）。分析結果は、第1段階の事例分析における事例やデータに深く根ざしている。

3) 質的内容分析 (p.393-)

- テキスト分析の古典的な手法。
- ひとつのカテゴリーの使用が特徴のひとつ。
- データからカテゴリーを生成するのではなく、既存のカテゴリーにデータを割り振ることが多い。ただし、そのカテゴリーはデータに照らして検討し、データに基づいて適宜変更する。この分析の最終目標は、データ量の削減にある。

● 質的内容分析の手順

- マイリングの方法によれば、第一段階は資料(データ)の確定と、設問への回答を得るた

めに適切なインタビューやその部分を選択すること。第二段階は、データ収集の状況を分析すること(どのようにこのデータが作られたか、誰が関わったか、インタビュー出席者など)第三段階は資料の形式上の特徴(いかに資料が記録されたか、録音が筆記記録かなど)…詳細は p.395 図 23.2 参照

コード化単位ユニット:分析しうる最小単位のデータ、テキストの最小の部分であり、ひとつのカテゴリーのもとでまとめられる可能性をもつもの。

文脈単位ユニット:カテゴリーの下に来る最も大きな単位。

分析単位ユニット:どの文章が一連の分析に用いられるか定義する。実際の分析を次に行い、最終段階として分析結果を設問に照らし解釈、妥当性を検討する。

● 質的内容分析の手法

次の三つの手法が含まれる。

要約内容分析

- 要約内容分析において、データの言い換えがなされる。同じ意味の別の言葉や、重要でない文章が削除されたり、同じ意味の言い換えを要約したりする。
- つまり、類似する発言の削除による資料の削減と、資料の内容をより高次元の抽象レベルにまとめる手法との組み合わせ。そのため、一連の規則が定式化されている。(具体的な規則は、p.398 図 23.3 を参照)

説明的内容分析

- 焦点がぼやけてあいまいな文章や矛盾する文章を、その文章が述べられた文脈に関するデータを用いて明らかにする。これにより説明的な言い換えが作成され、検討される。(具体例は p.398 ケーススタディ 23.4 参照)

構造化内容分析

- データの中にタイプや形式的な構造が求められる。形式、内容、タイプ、尺度のレベルで行われる。(具体例は p.399 ケーススタディ 23.4 参照)

● 方法論一般への貢献はなにか？

- 他のデータ分析方法よりもあいまいさがなく簡単に実施できるように思える。
- カテゴリー図式が画一化されているため、異なる事例の比較がしやすく、ひとつの図式にすべての事例を当てはめることも可能。より帰納的で事例志向の他の分析方法と比較すると好都合である。

● この方法を研究プロセスにいかに関与させるか？

- 主観的な見方を分析するために用いられる。半構造化インタビューでデータ収集が行

われる。

● この方法の限界は？

- この方法は量的研究方法の理想に強く影響されている。
- データ以外からつくったカテゴリーや理論由来のカテゴリーを用いて手早く効率的にコード化することで、実際のテキストのさまざまな側面が見にくくなることもある。テキストの解釈が図式的に実施される。

4) 包括分析 (p.401-)

- 主に理論的コード化および質的内容分析に対する実用的な補足。目的は、テキストに含まれるテーマの幅を把握すること。

● 包括分析のステップ

準備段階:研究者の背景知識とテキストに向けられる研究設問とを明確化すること

次の段階:この構成の細分化

次の段階:テキストの内容一覧表を作成

次の段階:テキストの要約を作成、どの程度まで本格的に解釈すべきかどうか、研究者の視点を基礎として評価する。

- これまでの作業の補足として、テキスト全体に対するキーワードを書き留めたり、そのデータを分析することで得られそうな結果や、理論的サンプリングの考え方にしたがっていさらなるテキスト、事例、情報などを選択もしくは取り入れた場合の見通しを文章化したりする。

● 方法論一般への貢献は何か？

- テキストの編集方法は、リソースに制限がある際や解釈に入る前にテキストになじむさい、あるいはより詳細な解釈のためにどのインタビューを選択すべきかを決定する際などに役立つ。

● この方法の限界は？

- 他のカテゴリー化の方法の補足にはなるが、代替にはならない。客観的解釈学や会話分析のような、テキストのシーケンス構造の解明を目的とした分析に方法は、このようなデータ編集の技法と併用できない。
- これまで論じた分析方法に共通する特性は、テキストをコード化することで解釈すること。また、カテゴリーの根拠となるデータを探し出して、そのカテゴリーに割り当てること。

コメント

分析や編集のための様々な工夫として、今回のコード化とカテゴリー化があると思った。資料はたくさんあるけれど、それをどう解釈し、どのようにまとめるのかで、全くそれについての見え方が異なってしまふことがあるように思う。もしかしたら、それは理論やトレンドありきでその資料をそれらのネタにしている（=そもそも GTA ではない）からそのように感じるのかもしれないが、一方で GTA に基づいていたとしても、膨大な量のデータを分析し、編集して論文にまとめる研究者は、いかに解釈したのか、いかに分析したのか、それを（当然ではあるが）自覚して資料に向き合う必要があると思った。また、その解釈がどうして妥当なのかを示したり、なにを根拠にそのような理論が成立すると考えたのかを明らかにするためにも、論理を考えることが大事なように思う。